

世之介の恋文

—近世都市文学としての再生—

羽 生 紀 子

はじめに

『好色一代男』巻一の二「はづかしながら文言葉」(以下、「文言葉」)は、世之介が手習いの師匠である出家に恋文の代筆を依頼するという、「滑稽な手紙」を題材とした話である。『太平記』巻二十一「塩冶判官讒死ノ事」に載る、吉田兼好の艶書代筆事件を下敷きにしたものであることはよく知られている。中村幸彦氏が、

『二代男』の巻一の「はづかしながら文言葉」は、世之助よすけがまだ文書くすべも知らないで、従姉に恋文をつける話だが、手習の師匠に書いてもらつて、はり物する召使女がこれを従姉に手わたす。これは『太平記』で高師直が、兼好法師と使女をつかつて、塩谷しほやの妻に恋文を送つた一事の俳諧化である。

と指摘しているように、兼好の艶書代筆事件を八歳の世之介の行動として俳諧化したものとするのが一般的な解釈である。

たしかに、文字も満足に書けない八歳の世之介が、従姉への恋文の代筆を手習いの師匠に依頼している様子は滑稽である。それは巻一の一「けた所が恋のはじまり」で、「まだ本の事もさだまら」ない七歳の世之介が腰元の袖をひく姿を描いたのと同様、早熟な世之介のあり方を誇張して描いたものといえる。

ただし前田金五郎氏は、この「滑稽な手紙」という題材が、兼好の艶書代筆事件に拠ったものであると同時に、近世初期以来笑話においてよく使われたものでもあったことを指摘している。^(註2)

本文(筆者注…「はづかしながら文言葉」)の場合、この説話(筆者注…『太平記』の兼好による艶書代筆を描いた説話)のパロディーであるとともに、近世初期以来の笑話の一類型の誇張化と思われる。

そして前田氏は、いくつかの笑話にみられる類型説話を紹介している。これらの類型説話は、「滑稽な手紙」をめぐる近世初期以来の笑いのありかを教えてくれると同時に、「文言葉」の新たな側面に気づかせてくれる。それは西鶴が「文言葉」においてなぜ「手紙」というアイテムをとりあげたのかという、根本的な問題につながるものである。

従来、『好色一代男』巻一の二「はづかしながら文言葉」は、『太平記』の兼好艶書代筆事件を俳諧的に誇張したものと解釈されるにとどまっていた。本稿では、『太平記』に描かれる艶書代筆事件や先行の類型説話との比較をとおして、巻一の二において西鶴が「手紙」をとりあげた理由について考えてみたい。

一 兼好の代筆艶書と世之介の恋文

『太平記』が江戸時代に広く享受されていたことについては、ここで改めて説明するまでもないことであろう。中世期から物語僧である「太平記読み」によって語られた『太平記』は、江戸時代には講談で語られる物語の一つとなった。元禄赤穂事件が起こると、竹田出雲らが『太平記』の「塩治判官の物語」を下敷きにした『仮名手本忠臣蔵』を創作するなど、『太平記』、特に高師直と塩治判官の話についてはよく知られていた。兼好の艶書代筆事件は、この塩治判官の一連の話の中で語られるエピソードであり、西鶴当時の人々にもよく知られたものであったと考えられる。その意味では、西鶴が「文言葉」において兼好の知られざる一面を描いてみせたと考える必要はないといえる。

『太平記』卷二十一「塩治判官譏死ノ事」のあらすじは以下のとおりである。(注)

侍従の局から塩治高貞の奥方が絶世の美女だと聞いた高師直は、奥方を何とか手に入れようとするが、なかなかうまくいかない。そこで吉田兼好に恋文を代筆させることにする。

兼好と云ひける能書の人を呼び寄せて、紅葉重ねの薄様の、取る手も薫るばかりなるに、人知れぬ心の奥をくれぐれと引き返し引き返し、黒み過ぎてぞ遣はしける。返事遅しと待つところに、使頓つかとんで立ち帰り申しけるは、「御文をば手に取りながら、開けてだに見玉はず。庭に抛なてられつるを、人目に懸かけじと取つて帰りたるなり」

奥方は師直の恋文を手には取つたものの開けて見ることもせず、庭に捨ててしまったのであった。使いは人目に触れてはまずいと手紙を持ち帰る。この首尾に機嫌を悪くした師直は、それ以後兼好の出入りを禁じた。

師直は、薬師寺二郎左衛門尉えい公義こうぎの提案でもう一度手紙を送ることにする。公義は思案して、和歌だけを書いた手紙を送った。

返すさへ手や触けんと思にぞ我文ながら打うちをかれぬ

(返されたにせよ、あなたのお手が触れただろうと想像しますと、私の書いた手紙ではあっても捨てておかれず、もう一度差し上げる次第です)

この手紙に対しては、奥方から「重きが上の小夜衣」との返りごとがあった。師直は歌の意味を理解できず、小袖をたくさん欲しいということか、などと言っていたが、薬師寺の解説により、「心はないわけではないが、人目をはばかっているのだ」と解し、奥方への恋心を募らせる。さらなる手引きを責め立てられ困り果てた侍従の局は、「奥方の湯上がりの姿をみせたら熱も冷めるだろう」と考え、風呂上がりの奥方の姿をのぞかせるが、その姿を見た師直はますます恋心を募らせる。ついに師直は塩治判官を譏訴して追い詰める。夫婦は子供を連れ二手に分かれて領国出雲へ逃亡を図るが、師直の追っ手にかかり悲惨な最期を遂げる。

一方、「文言葉」のあらすじは次のとおりである。

世之介は八歳で、小学に入る年になった。世之介は山崎の伯母のところに預けられていたが、ちょうどその近くに、滝本流の書を上手に書かれる法師がいたので弟子入りすることとなった。弟子入りの日、世之介は手本紙を差し上げて、師匠に手紙の代筆を依頼した。師匠は驚いて「そうは言っても、何を書けというのか」と聞くと、世之介は文案を述べる。その内容にあきれ果てた師匠は、「もう鳥の子もない」と言うが、世之介は「しからばなほ書きを」と望む。「まずはこれ出しなさい」と話を打ち切り、手本として「いろは」を書いて手習いをさせた。

世之介は下女を通じて従姉の「おさか殿」に手紙を渡す。一向に覚えのない差出人不明の恋文に、おさかは困惑して下女を叱る。母親がなだめて手紙を見ると、筆跡はまさしく手習いの師匠のものである。内容的には師匠のものとも思われないが、もしかして、と、師匠坊は世間からあらぬ疑いをかけられることとなった。

世之介は差出人は自分であることを伯母に打ち明ける。伯母は「まだ子供だとばかり思っていたのに。明日にも妹に知らせて、京でも大笑いさせてやろう」と思ったが顔には出さず、「娘は器量も人並みなものだから、もう縁付く先は決まっている。年さえ釣り合えば世之介の嫁にやつてもいいのだけど」と何事も自分の心にすべてを納めてしまった。その後世之介を気をつけてみればみるほど、本当にごさかしい様子であった。「すべてどんなことでも、道に外れたことは、頼まれても書くものではない」と、迷惑をかけられた法師が言われたことだ。

以上の二話を比較してみると、西鶴が「文言葉」で利用したのは、大きくとらえると次の二点である。

・兼好が師直の恋文を代筆する↓手習いの師匠が世之介の恋文を代筆する
・うまくいかなかったため師直の機嫌を損ね、兼好が出入り禁止となる（責任もないのに兼好が迷惑をかけられた）↓筆跡から、おさかに恋文を出したのは手習いの師匠ではないかと噂がたち、師匠が迷惑する

このほか、細かい点についてもパロディ化がみられる。師直が「紅葉重ねの薄様の、取る手も薫るばかりなる」という、恋

文にふさわしい美しい料紙を用意したのに対し、世之介は「手本紙」であった。「手本紙」であっても、世之介が持参しているのであるから質はさほど悪くはないかもしれないが、やはり恋文にはそぐわないであろう。師直が「人知れぬ心の奥をくれぐれと引き返し引き返し、黒み過ぎ」るほど多くの言葉を費やした恋文を書かせたのに対し、世之介も長々と文章を連ね、師匠が「鳥の子もない」（これ以上は書けない）と言うと、尚々書きを要求したのであった。長文の恋文も時にはよいものであるが、「黒み過ぎて」（師直の恋文）、「師匠もあきれはてて」（世之介の恋文）と表現されている点からは、両者ともに度を超した長文の、不粹な恋文であったということになる。

以上が両話の共通点であるが、この恋文がもたらした結果は異なっている。兼好の代筆による師直の恋文は、奥方に読んでもらうこともできず持ち帰られることとなった。その失敗に怒った師直は、責任を兼好に押し付けて出入り禁止としたのである。ただ、公義の発案により師直はもう一度恋文を出す。それは和歌を一首のみ書いたものであったが、奥方はその恋文には反応し、「重きが上の小夜衣」という言葉を発したのであった。結局、この奥方の一言が師直に曲解されることにより、師直が塩冶判官を陥れる具体的な行動をとることとなる。そこから塩冶夫婦の悲劇へと突き進むことになるのであるが、恋文の問題に戻ると、師直の恋文には二通あったことに気が付く。一通は兼好代筆の不粹なほどに言葉を尽くした恋文、もう一通は公義発案の和歌のみを書いた恋文である。

『太平記』には兼好に代筆させた恋文の文案者についての具体的な言及はないが、師直が考えたとみてよいだろう。兼好は「能書家」であるから呼ばれたのであり、「人知れぬ心の奥をくれぐれと引き返し引き返し」た文章を考えることができるのは、師直本人しかいない。それに対して二通目の恋文は、「公義が」師直に替つて文を書きけるが、詞をば何に書くとも、思ふ心の色を知らせがなければとて「和歌だけを書くこととしたもので、その和歌も公義が考えたものであった。奥方の「重きが上の小夜衣」という言葉を師直が理解できなかったことにも表れているように、師直は和歌的教養のない人物として描かれている。この二通目の恋文は、成功したとはいえないものの、奥方の反応を導き出した。奥方は言葉を費やした一通目の恋文には反

応しなかったが、恋歌には反応したのである。それは中世までの恋の世界であったといえるだろう。共通の知識を前提とした、共通の文化基盤をもつ共同体の中でやりとりされる恋文の世界である。その意味で師直は、伝統的な文化基盤からはみ出る人物として描かれており、新しい時代の武士としての人物像が現われていたといえる。

一方、「文言葉」の恋文は一通のみである。思いのたけをつづつた師直の「黒み過ぎ」た恋文に対して、世之介も長々と文章をつらねた。そしてこの世之介の恋文は、恋の成就には至らなかったものの、伯母の反応を引き出すこととなる。具体的に、この恋文騒動をきっかけに世之介が「姨にむかつてころの程を申す」という機会を得る。その気持ちを聞いた伯母は最初「妹に知らせて大笑いさせよう」と考えるが、さらに「年だに大方ならば世之介にとらすべきものを」と、年齢さえ不都合がなければ、恋の成就を予感させるような反応を示したのである。西鶴は「文言葉」において兼好の艶書代筆事件を題材としたが、その恋文によってもたらされた結果は反対であった。兼好の代筆した恋文は奥方からの反応も引き出せず失敗に終わったが、世之介の恋文はある意味で成功だったといえる。

八歳の世之介が手習いの初日に恋文の代筆をさせるという趣向は、確かに兼好の艶書代筆事件の俳諧化であった。ただしここで着目すべきは、なぜこの巻一の二という早い段階の章において西鶴が「手紙」を取り上げたのであろう。西鶴は恋文を代筆するという、通常のイメージからは外れる兼好の意外な一面に着目しただけではなく、この「言葉尽くした恋文」というものに着目したのではないだろうか。それは人と人との新しいコミュニケーションの形であった。師直はさほど教養のある人物ではなく、とにかく自分の心を一生懸命説明した恋文を送った。しかしそれは開封されることもなく拒絶されてしまう。中世までの伝統的共同体の世界ではこのコミュニケーションの形は拒絶されたのである。

『太平記』ではこの言葉を尽くした恋文は機能しなかったが、『一代男』においてはおさかも伯母も恋文を読んでいる。この時点では、差出人は手習いの師匠かと誤解を生んだが、さらに世之介が言葉を尽くして説明することにより、伯母が「年さえあえば」と思うに至るのである。成就是しないものの、世之介の恋文は機能したのである。

従来「文言葉」は、兼好の艶書代筆事件を俳諧化したもので、八歳の世之介の年齢不相応な早熟ぶりを描いたものととらえられるに過ぎなかった。その解釈に異論はないが、ここまでみたような恋文のあり方を考えると、「文言葉」では近世の新しいコミュニケーションのあり方が描かれていたといえる。「手紙」(恋文)というアイテムによって、近世的価値観が表現されていたのであった。

二 笑話の類型説話における「手紙」

原拠である『太平記』の恋文と比較することにより、「文言葉」においては近世期の新しいコミュニケーションのあり方として「手紙」(恋文)がとりあげられており、そこには近世的価値観が表現されていたと結論したが、さらに類型説話との比較により、この問題についての考察を深めたい。

前田金五郎氏は、笑話にみられる類型説話として四話を挙げている。『醒睡笑』の二話と『当世軽口咄揃』、『当世軽口手打笑』各一話である。これらは必ずしも西鶴が原拠にしたという意味で挙げられたものではなく、「文言葉」が直接的に摂取したというものではないが、近世初期の「手紙」をめぐる一つの類型であり、西鶴が手紙をとりあげる基盤を知ることができる。

『醒睡笑』の二話は、卷三「文の品々」にみえる「根来にて岩室の……」および「さもとらしき女房の……」で始まる話である。『醒睡笑』は元和九年(一六二三)成立の安楽庵策伝著の咄本(笑話集)である。「根来にて岩室の……」は短い話なので、次に本文を引用する。

根来にて岩室の梅松とかや聞えし若衆に、ぎこつなき法師の思ひを寄せながら、いひ寄らんとよりもなければ、せせり書する人をかたらひ、「文を一つ書きてくれられよ。文章のことは、われ好まん」となり。「ともかくも」と筆を染め、うかがひ居ければ、「おれはそなたにほれたげな。恋の心か、かしらがいたい」と。

ここでは滑稽な恋文を出すのは「ぎこつなき（＝無愛想でとつつきが悪い）法師」である。「ぎこつなき法師」は岩室の梅松という若衆に思いを寄せたが、言い寄る手立てがない。そこで「せせり書（＝書き散らすこと）する人」に頼んで恋文を代筆してもらふことにしたのである。文章は法師自らが考えた（＝われ好まん）のであるが、その文面は率直というべきか、素朴に過ぎるというべきか。「おれはそなたにはれたげな。恋の心か、かしらがいたい」という、恋の情緒も教養も感じられない文面であった。本話は法師が恋をしたものの、「ぎこつなき」性格そのままの口調の文章を書くことを依頼した話であり、法師の無教養から紡ぎだされた「恋文」に笑いのある話である。

『醒睡笑』巻三に載るもう一つの類型説話は次のような話である。

下女を連れた相当な身分らしき女房が清水寺に参詣した。舞台のあちらこちらにたたずんでいたが、順礼で、矢立（＝携帯用の文具）をもった侍めいた人物を見つけると、下女を遣わして「はなはだ恐縮ですが、人からもらった手紙に返事したいものの、誰も頼む者もいません。どうぞお力添えください」と頼んだ。順礼はあれこれ言ったりせずに、女房のところにやってきた。

女房は懐より料紙を出して渡し、いろいろ文章について注文をつけた。ところが実は順礼はいろはをさえ習わなかった者であった。今回の西国物語の際に楽書うたがきするために、「筑後の国の住人柳川のなにかし」だけが書けるようになっていて、その他は一字も書けなかった。料紙が真っ黒になるくらいに書きくどいた文はすべて「筑後の国の住人柳川のなにかし」で埋められていて、上書きもこれであった。まったく、恋もさめてしまう趣きであることよ。

この話は、無筆の女房が手紙の代筆を無筆者に依頼してしまつた話である。女房は、見た目で順礼が文字が書ける人物であると思ひこんだが、実は順礼も無筆だつたのである。ただし順礼は西国物語にあたり「筑後の国の住人柳川のなにかし」だけは書けるようになっていた。そして順礼は恋文の代筆を断らず、女房がさまざま考えた文案をすべて「筑後の国の…」だけを繰り返して書いていたという笑い話である。これも女房・順礼の無教養、そこから生じる笑いの世界といえる。

『当世軽口咄揃』は延宝七年（一六七九）刊行の咄本である。類型説話は巻四の十一「文盲なる女房文章を好む事」である。まったく一文字も書くことのできない女房がおり、その男は江戸にいた。共稼ぎをして生きて行こうと、呼び寄せるためにたびたび人を下したが、男は「間もなく上りましょう」と返事をするばかりで上ってこようとしなかった。女房は腹を立て、人を雇い、「江戸の男のところに出す手紙を代筆してください」と依頼した。相手が「簡単なことです。何と書きましょうか」と尋ねると、

まづ、わざと一筆申し上げ候。憎い人じや。上ろ上ろと云ふてばかりゐて、どりやどこに上つた、と書いて下されよと注文をつけた。こんな文章はあるまい。

本話は「醒睡笑」「根来にて岩室の…」と同じ種類の笑いといえる。無筆ゆえに代筆を頼み、手紙にはそぐわない文面を書くことを依頼してしまうという、依頼主の無教養を笑う内容である。無筆・無教養を笑いの対象としており、現代的観点からすれば趣味のいい笑いとはいえないが、江戸時代初期の笑いのあり方の一端がうかがえる。

『当世手打笑』は延宝九年（一六八一）刊行の咄本である。類型説話は巻四の八「或親仁人に状を頼む事」である。

文字の読み書きができないある親父がいた。他国に息子がいたが、嫁が亡くなったと聞いて息子に手紙をやることにし、代筆を頼んだ。親父は少しばかり一筆お願いしますと代筆者に注文したものの、後が続かない。そこで代筆者が「依つて」と書きましようかと尋ねると、親父は「いや、どこへも寄らない。すぐにやります」との返事で話が通じない。そこで他の者が「俺が文章を考えましよう。お夏が死んだとのことであるが仕方がない、少しも嘆くことではない。また、次の嫁を呼んだがいい。気持ちをしつかりもつて、死んだ人のことを忘れて、茶を飲むようにしなさい（＝平常心をもちなさい）」という文章を注文した。

本話も、基本的には無教養に起因する笑いである。この場合は滑稽な手紙の内容は手紙の差出人である親父が考えたものではないが、親父は文案も考えることができていない。そして氣を利かせた他の者の考えた文案が、これまたひどい内容であつ

たということ、さらなる無教養を笑いの対象としている。

前田氏は「文言葉」の「文章をこのまん」の「このむ」という語に着目し、『一代男』前後の用例を検討した上で、次のように説明している。^{注6)}

文盲な者が滑稽な手紙の文章を「このむ」のは当時の笑話の一類型であり、本章（筆者注：「文言葉」）の場合は、その類型を襲いながら、八歳世之介の、こまちゃくれた恋文の「このみ」という点に、西鶴技巧の牙えが見られる……西鶴は本章に於いて、「太平記」の説話のパロディーと、当時の笑話の一類型の換骨奪胎を行ない、世之介のアンファン・テリブルを表現したのである。

前田氏が指摘するように、文字の読み書きができない者が手紙の代筆を依頼し、そこで考え出される滑稽な文章によって笑いを生じさせるというのは当時の一つのパターンであったことが、類型説話から読み取ることができる。前田氏は、西鶴がこのパターンを利用しながら、『一代男』では世之介のアンファン・テリブル（大人を驚かせる早熟さ、非凡さ）を表現したと結論しているわけであるが、いまま少し詳細に先行の類型説話と『一代男』を比較しておきたい。

三 世之介の手紙

類型説話四話の内容をまとめると、次頁の【表】のようになる。

いずれの話も、基本的には手紙の書き手の無教養を笑うタイプの話である。『醒睡笑』「さもとらしき女房の……」は少し異なり、女房はそれなりの文章を考えたのかもしれないが、代筆を依頼した相手が笑は無筆であったという落ちである。ただしこれも、無教養を笑いの種にするという姿勢は同じである。

これらの類型説話の手紙のあり方と「文言葉」の世之介の手紙を比較すると、大きく違いのあることがわかる。世之介は手

【表】 類型説話の内容

作品	手紙の差出人	代筆者	手紙の内容
『醒睡笑』「根来にて岩室の…」	法師	せせり書する人	「おれはそなたにほれたげな。恋の心か、かしらがいたい」という、手紙とは思えない無骨な文章。
『醒睡笑』「さきもとらしき女房の…」	相当な身き 身分女性	侍らしき 順礼	いろいろと心のたけを書いてもらおうとしたが、実は順礼は無筆で「筑後の国の住人柳川のながし」しか書かれていなかった。
『当世軽口咄揃』卷四の十一	無筆の女房	雇われた人	上京してこない男への恨みと言であるが、手紙には不似合いな文言（「このやうな文章はあるまい」との評言）で締めくくられる。
『当世手打笑』卷四の八	親父	頼まれた者	親父は手紙の文章が思いつかない。他の人が考えてくれたが、嫁を亡くした息子への配慮も何もない、ひどい内容。

習いの師匠に代筆を依頼したが、それは年少のため文字をあまり書けなかったからであり、先行の類型説話で笑いの種にされている「無筆」「無教養」とは性質が異なっている。また手紙の内容は、『醒睡笑』「さきもとらしき女房の…」の場合は「いろいろの文を好む」とあるだけで具体的にわかからないが、それ以外は手紙の文章としては不適切なものであった。それに対して世之介の手紙は次のとおりであった。

今更馴れ馴れしく御入り候へども、たへかねて申しまゐらせ候。大方目つきにても御合点あるべし。二三日跡に娘さまの昼寝をなされた時、こなたの糸まきを、

あるともしらず踏みわりました。すこしもくるしうござらぬと、御はらの立ちさうなる事を腹御立て候はぬは、定めておれに、しのうでいひたい事がござるか。

ござるならば聞きまゐらせ候ふべし

これは文体的には手紙文に近いものであり、内容の問題は別として、先行類型説話の口語体の手紙とは異なっている。その文章は「しどもない」（たわいない）ものであったが、それは無教養に起因するものとはいえない。恋文の文章として適当ではないという点においては先行類型説話と同じであるが、笑いを生じさせるポイントは無教養ではなく、「おさか殿」が自分に惚れているという根拠のない自信を世之介がもっており、押しつけがましい恋文を注文

してみせたというところにある。書き出しこそ恋文めいているが、数日前のエピソードから相手の気持ちを勝手に推し量り、ついには、自分に気があるのだろう、言いたいことがあるのならば聞いてやるぞという、世之介のまったくの思い込みだけが前面に出された内容である。八歳という年齢で恋文を出すという世之介の早熟さも面白いが、頭でっかちで恋というものを理解していないのに、いっぱしの色男を気取って暴走している点にも笑いがあるであろう。いずれにしても、先行の類型説話のような、無教養を暴露することによる笑いではなかった。

以上のような意味からも、これらの先行の類型説話が「文言葉」の直接的な原拠とはいえないことは明らかである。ただし近世期初頭の「手紙」をめぐる状況という観点から考えると、これらの類型説話は重要なことを教えてくれる。類型説話において、無筆の人々の無教養からくる行動は笑いの対象となっていた。「さもとらしき女房の……」の女性については、「さもとらしき」（しかるべき、相当な）女房で使用人を連れているのであるから、そこまで無教養な人物とはいえないようにも思うが、近世初頭の識字率はまだまだ低いものであったのだろう。ただ、このような人々が「手紙」というアイテムを使用し始めているという点に、近世期の文化状況の変化があらわれている。

これらの人々は、従来「手紙」を使用する必要がなかった人々であったのである。つまり「手紙」使用文化圏の埒外の人々であったといえる。しかし江戸時代に入り、人々のコミュニケーションには変化が生じていた。『醒睡笑』等は、無教養により生じる不完全さを笑いの対象とし、無筆の人々をとりあげていた。その描き方は、知識層の傲慢さを感じさせるものではあったが、ここで重要なのは、そのような「手紙」にかかわる人々の姿がとりあげられている点である。これらの人々をそれぞれがとりあげたのは、そこに新しい庶民の姿が現れているからなのである。特に『醒睡笑』巻三に「文の品々」として一項がたてられ、手紙の問題がとりあげられていることは重要である。巻三ではほかに「文字知り顔」（知ったかぶり）、「不文字」（文字を書くことができないのに、それを気づかないふりをする）という項目がたてられている。笑いの対象としているにしても、手紙や文字といったものが庶民の生活に変化をもたらし、それらが生活の中で大きな意味をもちつつあるという

時代の変化が的確に映し出されているのである。

おわりに

以上、『好色二代男』巻一の二「はづかしながら文言葉」において、「手紙」というアイテムがとりあげられている意味について考察した。本話は従来指摘されてきたように、『太平記』巻二十一に描かれる兼好の艶書代筆事件を俳諧化したものであるが、「文言葉」は単にこの事件を近世的に描いたということではなかった。西鶴は「恋文」「手紙」というアイテムに着目し、その機能に近世的な新しさを感じ取っていたからこそ、冒頭部に続く巻一の二という、作品世界において重要な位置でこのような話をとりあげたのである。

西鶴作品において、「手紙」はしばしば登場するアイテムであったが、遺稿集に『万の文反古』（元禄九年（一六九六）刊）という書簡体小説があることは象徴的である。この「手紙」という、古くて新しいコミュニケーション・ツールに西鶴が着目していたことが示されている。

西鶴の浮世草子は、西鶴当時の現実世界を活写した文学であった。それは西鶴が生きた上方を中心とした、当時の都市文学であったといえる。都市はさまざまな階層の人々が集うところであり、自分たちの階層だけに共通の文化基盤だけに頼っていたのでは、コミュニケーションは成立しない。特に町人は自分たちの文化圏以外の人々ともコミュニケーションをとりつつ商売を成立させる存在であった。自分たちと同じ文化圏ではない人であっても理解してもらい、コミュニケーションを成立させる必要があった。それまでとは異なる、新しい共同体が誕生していたのである。西鶴が早く「文言葉」において「手紙」をとりあげ、最終的には『万の文反古』にまで結実させたのは、このような新しいコミュニケーションの形としての「手紙」に着目していたからであろう。

『二代男』巻一の「けした所が恋のはじまり」において、西鶴は近世町人の新しい色好みの姿を提示し、近世の新たな価値観を表現していた。それに続く巻一の二「はづかしながら文言葉」でも、西鶴は近世の新しい共同体の新たなコミュニケーションの形を象徴的に示す「手紙」というアイテムに着目し、近世の新しい価値観を描いていたのである。

注

- (1) 中村幸彦「西鶴入門」(『国文学 解釈と鑑賞』昭和四十四年十月)
- (2) 前田金五郎『好色一代男全注釈』上巻「文章をこのまん」の項(角川書店、昭和五十五年)
- (3) 『太平記』本文は「新編日本古典文学全集」(長谷川端校注・訳、小学館)による。
- (4) 前掲注2論文
- (5) 「根来にて岩室の…」が「文言葉」と類似することについては、藤井乙男にも指摘がある(『西鶴名作集』大日本雄弁会講談社、昭和十年)。
- (6) 前田金五郎「古語散考」(『専修国文』第二十号、昭和五十一年十一月)

(はにゅう・のりこ 本学准教授)